

# 日本海洋学会

## *JOS NEWS LETTER* (仮称)

2011年 第1号

### 目次

はじめに	1
書評	2
集会等の報告	3
● テクノオーシャン 2010 並行企画 シンポジウム 「海洋科学の大学院教育は企業の即戦力たりえるか?」報告	
● 海洋未来技術研究会 2010年度「海外渡航費用の援助」報告	
集会等のお知らせ	6
● 第14回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ	
学会記事	7
● 2011年度、2012年度役員選挙投票結果報告	
● 2010年度日本海洋学会秋季評議員会議事録	
● 2010年度第4回幹事会議事録	

## はじめに

「海の研究」編集委員長 岸 道郎

本ニュースレターをお送りするにあたり、編集を担当した「海の研究」編集委員長より、ご挨拶いたします。

ご存じのように、和文誌「海の研究」に続き、2011年から英文誌「Journal of Oceanography」も電子ジャーナルでの発行となりました。そこで、幹事会では、本年5月頃から、当初年4回程度、「ニュースレター」を発行し、会員の皆さまへ郵送でお届けすることを計画しております。

発行するニュースレターには、今まで海の研究で和文論文や和文総説の後に掲載していた「学会記事」や「書評」、「情報」とどまらず、読みやすい普及記事なども掲載する予定です。本号は、その先駆けとして、「JOS News Letter (仮称)」として電子ジャーナル「海の研究」の後に掲載しています。なお、紙媒体でお読みの方はモノクロ印刷版ですが、実際はカラーですので是非ウェブサイトもご覧ください。

なお、新たに発行する「ニュースレター」には専門の編集委員会を設置し、本ニュースレターとはデザインや記事のレイアウトを一新させ、いっそう内容の濃いものにする予定でありますことを申し添えます。

## 広告募集中

日本海洋学会では、会員相互の情報交換、学界の情報交換などを目的として来年度から年4回程度ニュースレターを紙媒体で発行することになりました。

企業の皆様の再度の広告掲載へのご協力をお願いいたします。

問い合わせ先: 日本海洋学会事務局:

メール: jos@mycom.co.jp

電話: 03-6267-4550      ファックス: 03-6267-4555

## 書評

## 海の科学がわかる本

藤岡 換太郎 著

成山堂書店, 2010年刊行,

204 ページ, 1900 円+税,

ISBN: 978-4425531219

本書は、海を主たる対象として、海全体を物理、化学、地学、生物の各分野から解説した本である。近年の環境問題や気候変動に関して、海の果たす重要な役割については、誰もが認めるところであるが、1つの専門的なものの見方では、全体を正しく理解することはできない。その理由は、各々の現象が相互に作用しているからである。この本は、そのような大局の理解を狙いつつ、各々のトピックスについては、先端の知識や将来の動向などについても言及している。もともと、本書は、独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)が行った「海洋と地学の学校」のテキストにその源があり、それを改訂・拡充したもので、海について総合的に解説した教科書といえる。

第1章は地球システム科学入門で、地球表層環境システムの概略と、そこに働く仕組みを理解する上でもっとも基本となる科学原理を解説している。なぜ、海洋が重要であるのかについて、全体の概略を模式図も含めて示してある。第2章は海洋物理の紹介と、エルニーニョ現象の海洋物理的解釈について、述べられている。エルニーニョ・ラニーニャ現象は、今や海洋環境のみならず、社会にとっても重要であるとの認識が広まっている。例えば、エルニーニョになると、オーストラリアは干ばつになり、GDPが1%近くも減るということで深刻な経済打撃となる。第3章は海洋・海水の変動が世界各地に異常気象をもたらすということで、中高緯度の大気・海洋循環の仕組みについて解説している。海水は、氷のみならず、海氷を作り出す時に、塩分の高い冷たい表層海水を生み出すという効果もあり、世界の中深層の循環にも影響を及ぼしている。第4章は海洋化学について述べている。温室効果気体としての二酸化炭素にまつわる地球表層環境システムにおける炭素循環について解説がある。氷期・間氷期の変動における二酸化炭素の変動は、極域の氷床コアの解析により初めて定量的にデータが提

出されたが、これは前世紀後半の環境研究において最大級の成果であると思われる。第5章は海洋生物適応科学というタイトルで、海洋に生息する生物について、海洋環境への適応、すなわち、水圧、水温、光量などにどのように呼応しているのかについて、興味深い解説がある。第6章では、近年急速に研究が進展している海洋微生物の働きが解説されている。微生物はサイズが小さいために、以前はあまり注目されてこなかったが、近年、物質循環の本質的な部分を担っていることが明らかになり、現在研究の進展がめざましい。第7章はプレートテクトニクスからブルームテクトニクスへの概念の発展を通じて、地殻進化をとりまく原理の変遷について解説がある。プレートテクトニクスは前世紀後半に誕生した概念で、その後の地学の発展に寄与してきた。近年では、地球のより深部も統一的に理解しようとするブルームテクトニクスが新たな固体地球のパラダイムを築くと期待されている。第8章は将来の気候を予測したり、現在の気候変化の仕組みを研究する上で重要なシミュレーション研究についてあつかっている。コンピューターの発達により、地球システム自体は実験をすることが不可能であるが、コンピューターという装置を使って、模擬実験をすることで、近年、地球表層環境システムについての理解は飛躍的に深まっている。第9章は北極域での環境をあつかっている。近年、北極域の海水が激減しているとの報告がある。将来、フランス産のワインは、喜望峰まわりでなく、北極海航路をへて日本に届けられる可能性もでてきたが、このような北極域での海水の状況変化は、海洋大循環を介して、地球規模での気候や環境変化をもたらすであろう。第10, 11, 12章は海洋観測あるいは南極観測について述べられている。科学の発展は、技術の発展、特に、観測技術の発展とともに進展してきた。これからの「海の研究」についても、観測技術の開発は、科学的知見および科学的発展にとって鍵となると思われる全体として、長さも適当でよくまとまっているので、海の科学の全体を理解するために、本書は好著で、推薦できると考える。

(川幡穂高, 東京大学大気海洋研究所)

## 集会等の報告

### テクノオーシャン 2010 並行企画 シンポジウム「海洋科学の大学院教育は企業の即戦力たりえるか?」報告

**日時** 2010年10月15日(金)13:30~16:30  
**場所** 神戸国際会議場 5F 505号室  
**主催** 日本海洋学会教育問題研究会  
**コンビナー** 豊川雅哉 (独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所)  
 藤井直紀 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター)  
**出席者** 15名(うち講師5名), Ustream中継視聴2名

#### URL

<http://coast14.ees.hokudai.ac.jp/osj/event20101015.htm>

#### Ustream

<http://www.ustream.tv/channel/technoceanikaiyopostdoc>

テクノオーシャンという企画自体、海洋学会からの参加者が少ない企画だったようで、全く聴衆を集めることができず、企画としては失敗だった。一方講演はそれぞれ大変参考になる内容で、特に企業からの2題の講演は普段聞けない話だった。参加者の間では好評で、出てよかったと言っていただけた。研究会長からも「海の研究」に記録を残すべき、春の学会のナイトセッションで第2弾を、という宿題をいただいた。以下に講演内容をかいつまんで紹介する。講演にタイトルがある場合はタイトルを付す。

#### 講演「ポストドク問題、展望と課題 生き残るにはどうすればいいか」:

榎木 英介(医師, 博士, サイエンス・サポート・アソシエーション(SSA)代表, NPO 法人サイエンス・コミュニケーション理事(当時))

ポストドクの就職の現実やポストドク問題の全体像について、前回国勢調査などを参照しつつ、具体的な数値をあげて紹介していただいた。ポストドク問題の原因は博士修了者と企業の求人との需給のギャップにあること、同じ理系でも海洋学会に関係の深い理学系と農学系で供給過剰が顕著で、工学系と保健系で需要が多いことが示された。産業界では研究者よりも技術者の需要が高く、ものづくりに活かせる能力を求めているという。ポストドクの採用は中途採用と

同じで定期的な採用は無い事、中途採用と共通する問題として、年功序列の雇用慣行が障害になっていることが指摘された。当日の講演スライドは下記にて公開されている。

<http://www.slideshare.net/enodon/101015>

また、企画後に講演内容を含む著書(「博士漂流時代」ディスカヴァー・トゥエンティワン ISBN:978-4887598607)が発売された。

#### 講演「神戸大学のキャリア・就職支援 すべては学生のキャリア支援のために」:

内田 正博(神戸大学キャリアセンター長(併任), 神戸大学大学院国際文化科学研究科教授)

神戸大学での大学院生向けキャリア支援の現状についてお話しいただいた。キャリア支援の主力は学部生の就職支援に置かれているが、外国人留学生を含む大学院生の支援にも力を入れている。2010年度では4月から8月に院生向けのキャリアガイダンス(講演と院生のディスカッション)を4回行い、11月には日本物理学会キャリア支援センター他と共催で、博士・ポストドク対象の合同企業説明会も企画されている。取組の成果もあつてか、農学系、自然科学系と海事系を合わせた21年度の博士修了者67名の6割強が企業他に就職した。

#### 講演:松野 健(九州大学大学院総合理工学府大気海洋環境システム学専攻教授)

ご自身の専攻での最近の博士修了者の進路状況を具体的数値で示していただき、博士課程の大学院教育を受けた学生の志向と、企業が求める博士との間にあるギャップなど、大学の現場に関わるお話をしていただいた。最近の大学院改革では、企業への対応を考慮して、ゼネラリストとしての資質を組み入れた人材の養成を目指そうとする。しかし大学院本来の役割は基礎的専門的知識を前提に、客観的事実と論理的展開によって新しい真理に到達できる能力を養うところにある。企業にもそういう力は必要

だが広い範囲への応用が必要なのに対して、学生の指向は特定の興味を深く掘り下げたい、というように、それぞれの間にギャップがあることが指摘された。PD のポストは増えているが、教員の定員は減っている。博士課程は定員充足率を上げることが強く求められており、将来のポストを削減しながら、研究者の予備軍を作り続けることを強いる制度になっている矛盾点が指摘された。

#### 講演:柴木 秀之(株式会社 エコー 防災・水工部 技術研究所)

海洋・海岸・港湾の調査・解析・設計業務に従事している民間企業(建設コンサルタント)の観点から、業務の最近の動向、業務の受託において技術者にもとめられるもの、業務を実施するうえで求められる能力について。次に民間での研究開発への取組例や、民間企業への就業環境、博士取得者に対するイメージ等について、お話しいただいた。業界全体の売り上げ減少により競争が激化しており、技術者への求人も減少傾向にある。技術者に求められる資格は主に技術士。発注方式が価格競争方式では品質が評価されないので、技術提案を競わせるプロポーザル方式が一時取り入れられたが、現在は価格と技術評価を合わせた総合評価方式が主流になっている。技術評価の中で技術者競争力への要求が高まっており、技術者は、個々の受託業務について、提案力(専門技術の応用力、柔軟性)、説明力(プレゼンテーション力、協調性)、管理能力(工程管理、品質管理、迅速性)で採点され、採点表が技術評価の資料となる。さらに技術者の採点表は過去数年分が蓄積され、共通の情報として流通している。従って、望ましい技術者像は、○基礎学力・研究能力の有効活用により、業務課題への柔軟な対応が可能な技術者、○工程管理(時間管理)を基本とする業務(研究)計画の立案と遂行が可能な技術者、○個人の技術力(業務遂行能力)が高いとともに、グループ内で協調することが可能な技術者であると結論づけた。

#### 講演:馬場 和史(JFEアドバンテック(株)常務取締役 本社工場長兼海洋河川事業部担当)

計測機器メーカーとして、博士取得者がどのような業務に就いているか、専攻との関係、彼らの仕事に対する問題意識、民間企業としてどのような人材を望むか、などの情報提供をしていただき、ポストク問題に対する民間企業としての意見、考えをお話し

いただいた。JFE アドバンテックの海洋河川事業部と商品企画開発部にはそれぞれ24名中4名、31名中3名の博士を雇用しており、うち海洋系3名と電気計測系1名は海洋河川事業部に、化学系1名と電気計測系2名は商品企画開発部に所属している。海洋河川事業部の顧客は海洋研究を行う大学、研究所の研究者が主で、顧客のニーズ・要望の正確な把握、新製品開発のテーマ設定のため海外を含めた海洋研究動向の把握、輸出拡大・海外メーカーとの競争のため、英会話力のある海洋分野の専門家が必須である。一方、商品企画開発部では機械・回路・センサー等の総合技術で製品が生み出される、国内・海外メーカーとの競争に勝つために、常に技術力を向上させ、新製品を市場投入していく必要がある、個々の技術分野で専門性の高い技術者が必須であることから博士を配置。博士の業務状況は、研究業務専従はいない、専攻に近い業務の担当は半数だが輸出や営業他の技術開発業務を担う、専攻+αの業務を担うため入社後全員専攻外を勉強、海洋研究室員は貿易ないし営業と兼務。海洋系の博士は入社後、社内製品の構造・製造方法、輸出国の文化・歴史・環境、専門を噛み砕いて再構成し、相手に合わせて話す技術などを学んでいるが、ドクターは専門以外の知識吸収においても理解力が高いとの評価である。期待する人材像として、課題解決能力の高い人を筆頭に、協調性、柔軟性、個性を挙げた。専門分野の知識は課題解決に役立つが、課題は常に変化するから、他の分野の知識を身に付けていくことが必要。研究を通じて得た成果よりも、成果を得た研究プロセス(課題解決プロセス)が企業において貴重であるとした。採用実態では最近は中途採用の方が多く、入社年齢は30歳前後を中心に36歳くらいまで。30歳前後で入社しても不公平にならない人事制度にしたそうだ。最後にポストク問題への提言として、国家の技術戦略・海洋戦略の具体化と実行を期待するとともに、技術協力している欧米企業のトップがほとんどドクターであることから、ドクター起業への支援の仕組みが必要と指摘した。また、民間企業への就職を増やすためには、「専門を生かす」から「専門を極めたプロセスを生かす」への転換、研究職にこだわらない幅広い就職選択への意識変革、求人側(企業)と人材供給側(ドクター)のハッピーな出会いの仕組み、やりがい(社会貢献、人間貢献)は共通との認識が必要だとした。

#### 総合討論

内田:企業も社会貢献を担っていると学生の認識を

変える必要がある。

松野:研究者をめざし博士まで来る人は、芸術家のような自由度を求めているのではないか。企業では自由への制約が多いのでは。

馬場:商品開発に意見が生かされることも。

松野:厳密な工程管理など、働く上での制約が多いのでは。

馬場:その製品がいつまでに仕上がるのかなど、時間軸の管理は企業としては重要。

豊川:年齢的な限界は。

馬場:40歳前後。40歳過ぎると残り期間が少なくなり難しい。自分より若い管理職に仕えることになるというメンタルな面も。

豊川:40歳前後の年収はどれぐらいか。

馬場:固定給与と年々の業績によって変動する部分がある。例えばドクターで40歳半ばだと課長クラスで7百数十万円ではないか。

柴木:最近は成果主義が導入され、例えばAAから

Fまで8段階に分ける。40歳から50歳だと部長あたりのクラスになるが、AAになると800万円くらい、Fになるとおそらく500万円いかない、その範囲内でメリハリをつけるようにしている。

馬場:年収を気にするより、みんなの収入を上げようという気概を期待する。

市川:結果的に人数は少なかったが、有意義な会だった。当事者の大学院生がほとんどいなかったのは残念だが、初めてオフィシャルな場で企業の方と大学関係者が集まって、今後の大学院生の教育、社会に送り出すためにどうしていこうかということも含めて、貴重なお話をいただいたことを感謝する。今後のステップとして、春の学会の時にシンポジウムやナイトセッションを行えばいいと思うが、その時はまたご協力をよろしく願います。本日はありがとうございました。

(豊川 雅哉, 中央水研)

## 海洋未来技術研究会 2010年度「海外渡航費用の援助」報告

### Asia Oceania Geosciences Society 7th Annual meeting 参加報告

会期 2010年7月5日～7月9日

場所 Hyderabad, India

The 7<sup>th</sup> Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) was held at the Hyderabad international convention centre, India during July 5-9, 2010. The purpose of the AOGS conference was to expand its presence in Geosciences society in the world and to promote geophysical science for the benefit of humanity in Asia and Oceania. This year there were more than 1000 registered participants from more than 50 countries. There were oral and poster presentations. The conference hosted by the Indian Geophysical union.

Feedback from the conference was very positive- I greatly enjoyed the chance to meet senior researchers and colleagues from so many countries, the opportunity to network and to learn from one another and chance to explore ideas.

There were 6<sup>th</sup> sessions in AOGS conference. I have submitted my abstract to ocean science session for oral presentation. My topic was "Nutrient Flux in Submarine Groundwater Discharge in Rishiri Island,

Japan: Implication for Ecological Balance". The purpose of this study is to investigate the relationship between SGD nutrients and concentration of phytoplankton (chlorophyll). Participants were gave suggestions to improve research ideas after seminar and also suggested to submit to the journal as soon as possible.

I would like to thank "The Oceanographic society of Japan" for financial support.

(Ajit Kumar Mandal, 富山大学)

### ClimeCO2 参加報告

会期 2010年8月23日～8月27日

場所 ブレスト, フランス

ClimECO2(Climate, Ecosystem, Economy, CO2を掛けた造語)は気候変動の水産と海洋への影響について物理学・化学・生物学・社会学的側面から研究している博士課程の学生と博士号を取得したての若手研究者を集めて行われた国際サマースクールである。サマースクールは2010年8月23日から

27日までフランスのブルターニュ地方の最西端ブレストで開催され、IUEM(The European Institute for Marine Studies)とIMBER(Integrated Marine Biogeochemistry and Ecosystem Research project)とGIS Eruropôle Merにより共催されている。26カ国より58名の若手研究者が参加し、日本・中国・韓国・ロシアの4カ国から6名がPICESの派遣若手研究者として参加した。初日はIUEMの理事であるDr. Yves-Marie Pauletより開催の挨拶から始まり、サマースクールを通じて生まれた若手研究者同士の交流から新しい研究が育まれることを期待すると述べた。その後、ヨーロッパの招待講演者より日毎に異なるテーマで講義が行われた。

各テーマは次の通り。1) Climate, ocean circulation, biogeochemistry and marine ecosystems. 海洋酸性化を中心に、気候変動が海洋生態系に与える影響について最新の理論、観測結果、酸性化実験や温暖化実験より得られた結果が紹介された。2) Climate driven changes in marine biodiversity and the interactions among species. 気候の変化が海洋における生物多様性と種の分布に及ぼす影響について紹介された。3) Impact of global change on marine resources and uses. 水産業や海運業の現状と予測される社会的な変化について、気候変動と社会的な影響について紹介された。4) Vulnerability and adaptation to climate change in the coastal zone. 海面上昇による海岸浸食についてフランス領ギアナにおいて予測される影響と、沿岸域における資源管理についてイギリスにおける取組が紹介された。5) Communicating climate change: from information to action. 気候変動に関

わる科学をどうやって一般市民や行政へ伝えるか、コミュニケーションに関する講義となった。なお、以上の講義はClimECO2公式Webサイト上で動画配信される予定である。

この他に若手研究者の研究発表が行われた。口頭発表は主催者により選択された12名のみであった。それ以外の発表はポスター発表となった。当然の事ながら選択された発表はサマースクールのテーマに関わるものばかりであった。ポスターは幅広いテーマで発表が行われた。毎日、ポスターを見ながらコーヒーブレイクとなるため、拙い英語でも時間をかけて議論することができた。発表テーマについて海洋酸性化が最も多く次に生物多様性が多かった。海洋生態系モデルを利用した発表もあったが、既存のモデルを利用した研究ばかりで、モデルを開発した発表は私だけであった。モデルを使った研究者に、細かい設定に関わる質問しても、開発者ではないから解らないと返答され、お互いに困惑した場面もあった。

宿泊施設は相部屋のホステルで、会場までの交通手段はシャトルバス1台のみであった。これらは参加者の評判も悪かった。しかしながら5日間にわたり若手研究者と寝食を共にするため、自然と親交を深めることができた。高い渡航費という問題はあるが、海外の友達を増やす上で若手研究者に、このようなサマースクールの参加をお勧めしたい。なおサマースクール終了後もFacebook上で交流の維持を試みられている。このようなインターネットを活用する姿勢には帰国後も驚くばかりであった。

(照井 健志, 北大院環境)

## 集会等のお知らせ

### 第14回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ

第14回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催予定をしております。

大会日程 平成23年5月28日(土)～29日(日)  
 会場 グランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター)  
 大会役員 大会会長 高野 二郎(東海大学学長理学部化学科 教授)  
 実行委員長 齋藤 寛(東海大学海洋学部)水産学科 教授)

大会事務局  
 〒424-8610 静岡県静岡市清水区折 3-20-1

東海大学海洋学部内  
 第14回マリンバイオテクノロジー学会  
 大会実行委員会  
 TEL: 054-334-0411  
 FAX: 054-334-5095  
 E-MAIL: marinebio14@ml.tokai-u.jp  
 懇親会 開催日 5月28日(土)18:00～20:00  
 場所 東海大学社会教育センター  
 海洋科学博物館(大水槽前)

#### 大会の内容

1. 一般講演(口頭発表, ポスター発表)
2. シンポジウム(一般)

\*シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

**発表形式**

1. 口頭発表: 一般講演は質疑含み 15分  
液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表: 学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

**一般講演のセッション**

1. 微生物 2. 微細藻 3. 海藻・付着生物
4. 魚介類 5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラリゼーション 7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応 9. その他

**発表申込みの締め切り**

平成 23 年 3 月 11 日 (金) 必着

**講演要旨の締め切り**

平成 23 年 3 月 31 日 (木) 必着

**事前参加登録締め切り**

平成 23 年 4 月 30 日 (土) 必着

**事前参加登録費**

会員 5,000 円 学生 2,000 円 非会員 9,000 円  
非会員学生 4,000 円

**当日参加費**

会員 7,000 円 学生 3,000 円 非会員 10,000 円  
非会員学生 5,000 円

※協賛いただきました団体の会員の方は、当学会会員と同等の参加費で参加できます

**講演申し込み方法**

発表希望者は書式に従って、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記(連名の方全員)、演題を明記の上 web 上よりお申し込み下さい。

**参加登録方法**

参加登録希望者は書式に従って、申込者氏名・所属および連絡先を明記の上、web 上よりお申し込み下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

第 14 回大会ホームページアドレス: 準備中  
学会ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/>

**学会記事**

**2011 年度, 2012 年度役員選挙投票結果報告**

日本海洋学会会則及び選挙細則の定めるところにより、2011 年度, 2012 年度役員(会長 1 名, 副会長 1 名, 監査 2 名, 評議員 56 名)の選挙を行い、下記の会員が選出されました。

選挙公示・投票用紙発送: 2010 年 11 月 12 日  
投票締切: 2010 年 12 月 1 日  
開票: 2010 年 12 月 3 日  
開票作業: 中野 俊也, 浜崎 恒二, 西川 淳, 多田 雄哉, 古谷 浩志, 大久保 綾子, 村上 潔, 石崎 士郎  
投票総数: 302 票 (有効投票数 302)

**開票結果**

**1) 会長**

1 花輪 公雄 283  
次点 山形 俊男 4

**2) 副会長 (得票数 1 票の方は省略)**

1 津田 敦 265  
次点 岸 道郎 3

**3) 監査 (5 位以下省略)**

1 寺崎 誠 37  
2 今脇 資郎 33  
次点 小池 勲夫 25

**4) 評議員 (次点者で得票同数の場合、順位は抽選による)**

北海道・東北地区 (定員 9 名)

1 須賀 利雄 78  
2 岸 道郎 77  
3 江淵 直人 69  
4 大島 慶一郎 68  
5 川村 宏 60  
6 伊藤 進一 49  
7 齊藤 誠一 45  
7 三寺 史夫 45  
9 見延 庄士郎 44  
次点 齊藤 宏明 41

関東地区(定員 27名)

1 日比谷 紀之	84
2 植松 光夫	80
3 道田 豊	76
4 才野 敏郎	72
4 川辺 正樹	72
6 今脇 資郎	66(辞退)
7 安田 一郎	65
7 古谷 研	65
9 蒲生 俊敬	64
10 木暮 一啓	62
11 吉田 次郎	61
11 石丸 隆	61
13 山形 俊男	59
14 岩坂 直人	56
15 小川 浩史	52
16 深澤 理郎	51
17 中田 薫	48
18 神田 穰太	47
19 池田 元美	43
19 水野 恵介	43
19 西田 周平	43
22 岩尾 尊徳	41
22 高槻 靖	41
24 市川 洋	39
25 蒲地 政文	37
25 松山 優治	37
27 木村 伸吾	36
次点 1 河宮 未知生	35(繰上)
2 岡 英太郎	33

北陸・東海地区(定員 5名)

1 久保田 雅久	66
2 石坂 丞二	59
3 轡田 邦夫	58
4 田上 英一郎	39
5 加藤 義久	33
次点 植原 量行	23

関西・中国・四国地区(定員 7名)

1 上 真一	77
2 武岡 英隆	65
3 淡路 敏之	64
4 秋友 和典	56
5 磯辺 篤彦	50
6 金子 新	29
7 藤原 建紀	28
次点 山本 民次	26

西南地区(定員 6名)

1 柳 哲雄	75
2 市川 香	52
3 松野 健	48
4 小池 勲夫	41
5 清野 聡子	37
6 平 啓介	32
次点 武田 重信	31

外国地区(定員 2名)

1 謝 尚平	49
2 裘 波	46
次点 古恵 亮	14

議事録

2010年度日本海洋学会秋季評議員会議事録

日時 2010年9月7日(火) 18:00~20:00

場所 東京農業大学 オホーツクキャンパス

出席者 小池会長, 池田, 磯辺, 市川(香), 市川(洋), 今脇, 植松, 江淵, 小川, 加藤, 蒲生, 川辺, 神田, 岸, 轡田, 久保田, 須賀, 平, 武岡, 谷口, 田上, 津田, 中田(薫), 西田, 日比谷, 松野, 道田, 各評議員, 鈴木海洋環境問題委員会委員長, 清野環境科学賞選考委員長, 田中, 島田, 河宮, 川合, 浜崎, 各幹事, 毎日学術フォーラム(出戸, 平坂)

委任状 秋友, 淡路, 石坂, 石丸, 井関, 岩坂, 上, 大島, 金子, 川村, 木村, 木暮, 齊藤, 高槻, 武田, 寺崎, 中田(英昭), 花輪副会長, 深澤, 藤原, 風呂田, 松山, 水野, 安田, 柳, 山形, 謝, 各評議員

開会に先立ち, 中田幹事から評議員会細則第3条の規定により評議員会の成立要件が満たされているとの報告があった。

1. 会長挨拶(小池会長)  
谷口大会実行委員長をはじめとする実行委員会への謝意と道東ではじめての開催であり, 海洋の拠点が広がったことの喜びが述べられた。



また、JOの発刊について Springer Japan との契約が調い、投稿規定の改定等を行っていく必要があるので活発な議論を期待すること等が要請された。

2. 大会実行委員長挨拶(谷口委員長)

挨拶の中で東京農業大学オホーツクキャンパスの沿革が紹介された。また、本大会の実行委員会は道東地区会員で構成され、釧路の北海道区水産研究所、網走水産試験場、紋別のオホーツク流水科学研究所など東西250km ぐらい離れた地域から集まって開催しているなどが紹介された。

3. 報告事項

1) 会務報告

a) 庶務(田中幹事)

2010年1月から7月までの会員異動状況、シンポジウム等の開催、共催等について報告があった。

b) 会計(河宮幹事)

海の研究とJOの電子ジャーナル化で予算の組み替えを行う必要があるが、アンケート等で印刷冊子の郵送数等を把握した上で詳細を報告する旨の報告があった。

c) 編集

i) *Journal of Oceanography* (津田編集委員長代理)

第66巻5号、6号の編集作業が順調に進んでいること、特別セクションの申し込みがあり、幹事会で認められた旨の報告があった。

ii) 「海の研究」(岸編集委員長)

投稿数の推移について報告があった。電子ジャーナル化に伴ってページチャージを無くしたことを投稿規定に反映するため、規定の改定を行いたいとの提案があった。審議の結果承認された。

d) 研究発表(道田幹事)

秋季大会における講演要旨の抄録について、手違いにより申し込み時点で

の収集がされてなかったが、抄録のデータベース化は学会の収入増につながるので協力依頼があった。2010年度春季大会が3月26日～30日の日程で東京海洋大学所属会員の担当により東京海洋大学品川キャンパスにおいて開催されたこと、同秋季大会が9月6日～10日の予定で東京農業大学オホーツクキャンパスにおいて道東地区会員担当により開催中であることが報告された。また、2011年度春季大会は3月22日～26日に東京大学大気海洋研究所所属会員による担当で柏の新キャンパスにおいて、同秋季大会は9月26日～30日に福岡地区会員の担当により開催予定であることが報告された。合わせて、2012年度春季大会を3月につくば地区会員の担当により開催することが提案され、承認された。

e) 選挙管理(浜崎幹事)

2011・12年度の役員選挙の公示と今後の予定について案内があった。

f) 賞選考

i) 学会賞・岡田賞・宇田賞(植松委員長)

学会賞・岡田賞・論文賞の選考の準備状況と今後の予定について報告があった。

ii) 日高論文賞・奨励論文賞(神田委員長)

日高論文賞・奨励論文賞の選考の準備状況と今後の予定について報告があった。

iii) 環境科学賞(清野委員長)

環境科学賞の選考の準備状況と今後の予定について報告があった。

g) 海洋未来技術研究会(道田幹事)

海洋未来技術研究会の会員数が減少傾向にあり、若手の海外渡航支援に活動の重点を置きたいとの会の意向が報告された。宇田賞の賞金は、当面学会から出し、賞牌は海洋未来技術研究会から出していただくという方向と同会会員増への協力依頼が述べられた。

h) 海洋環境問題委員会(鈴木委員長)  
活動状況について、2010年度の青い海助成2件の選考に関わったこと、昨年度の助成の成果をHPに掲載すべく準備中であること、諫早湾長期開門調査への提言のためのWGを立ち上げたことについて報告があった。

i) 沿岸海洋研究会(武岡研究会長)  
「沿岸海洋研究」48巻1号が発刊されたこと、現在2号の編集中であること、秋季大会のシンポジウムとして「オホーツク海を起源とする熱塩・物質循環システムとその変動」を開催したこと、2011年度春季大会時のシンポジウムとして「海洋前線と水塊形成(仮題)」を開催予定であることが報告された。

j) 西南支部(小川幹事)  
九州沖縄地区シンポジウムの開催予定が報告された。

k) 教育問題研究会(市川研究会長)  
2010年度前期の活動報告と2010年度後期の活動計画について報告があった。

## 2) 学会関連報告

a) 学界動向(花輪副会長、道田幹事による代読)  
日本学術会議、SCOR分科会関連、IOC/UNESCO関連、IAPSO関連、PICES関連、GODAE関係、SOLAS関連の各種情報が紹介された。

b) 日本地球惑星科学連合(川合幹事)  
2010年度連合大会の報告と2011年度大会開催に向けたスケジュール等が報告された。

## 4. 審議事項

1) JOの投稿規定改定等について  
(津田編集委員長代理)

審議に先立ち、JO電子化に向けたスケジュールについて説明があった。

(1) ページチャージを無料化すること、Open ChoiceをJOに適用しないこと、という2点を柱とする投稿規定の改定について提案があった。審議の結果、提案通り承認された。

(2) これまでの投稿規定の評議員会承認を幹事会

承認とし、幹事会が必要と認めた場合には評議員会に諮ることを骨子とする投稿規定に関する会則の変更が提案された。審議の結果承認され、3月の総会の審議にかけることとなった。

(3) 和文抄録のとりやめが提案された。JSTに和文要旨を提供すると収入となる、などの意見があった一方で、Springerのeditorial managerには和文対応のシステムがないことや編集委員の負担軽減を考えたい、との意見もあった。もう少し時間をかけて検討し、3月の評議員会で再度提案することとなった。

## 2) 海洋環境問題研究会会則について

(小川幹事、鈴木委員長)

会則制定までのこれまでの経緯について小川幹事から説明があった後、鈴木委員長より海洋環境問題研究会会則案が説明された。3月までさらに検討することとなった。

## 3) その他

- ・ 市川評議員より、ポスドク問題、大学院学生の就職問題について学会のサポートを考えてほしいとの要望が出され、会長から幹事会で検討したい旨の回答があった。

- ・ 清野環境科学賞選考委員長より、沿岸環境関連学会連絡協議会(沿環連)をベースとするCOP10への参加の枠組みを作るとのアナウンスと海洋学会への協力依頼があった。

## 2010年度第4回幹事会議事録

日時 2010年9月6日(月) 18:00～

場所 ホテルしんばし

出席者 小池会長、小川、川合、河宮、岸、島田、田中、中田、浜崎、道田、各幹事、津田編集委員長代理、事務局毎日学術フォーラム(出戸、平坂)

## 議題

1. 議事録(案)確認  
2010年度第3回幹事会の議事録を確認した。

## 2. 審議事項

(1) 入退会について(田中幹事)  
入退会(2010年6、7月)を承認した。入会 32

名, 退会 10 名, 2010 年 7 月末現在会員数 1922 名。

- (2) 後援・協賛等について(田中幹事)  
シンポジウム後援 1 件, シンボルマーク使用 1 件, シンポジウム協賛 2 件を承認した。
- (3) 募集・推薦等の依頼(田中幹事)  
研究助成募集, シンポジウム開催等について報告があった。  
島津科学技術振興財団から依頼のあった島津賞候補推薦について, 金子新会員と佐野有司会員の推薦を承認した。
- (4) 2011 年度・2012 年度の大会について(道田幹事)  
道田幹事より, 2011 年度春季大会は東京大学大気海洋研究所会員の担当により同研究所において開催されること, 秋季大会は福岡地区会員の担当により九州大学筑紫キャンパスで開催されることが報告された。2012 年春季大会は筑波地区の会員の担当により開催する方向で調整中との報告があり, 承認した。
- (5) JO の投稿規定改定等について(津田編集委員長代理)  
「Mode water」をテーマとする JO 特別セクション号の提案があり, 承認された。  
①ページチャージを無料化することと Open choice を JO に適用しないことを柱とする投稿規定改訂, ②投稿規定の評議員会承認を幹事会承認とする会則の改定を総会で行う, ③Springer の editorial manager に和文に対応するシステムがないことから和文要旨とりやめる方針, との提案があった。これらの提案を評議員にはかることとなった。
- (6) JO の冊子体配布希望に関するアンケートについて(小川幹事)  
JO の冊子希望者数を把握するためのアンケートの内容について小川幹事から説明があり, 一部修正の上承認された。
- (7) 電子ジャーナル化後の印刷物の発送について(小川幹事)  
年 4 回ニュースレターを出すことも考慮し, 電子ジャーナル化後の印刷物の発送手数料の見積もり額が示され, 今後の発送方法について意見交換した。企業広告をニュースレターに掲載することなども含め, 今後さらに検討し

ていくこととなった。

- (8) 名誉会員に関する幹事会内規の改定について(小川幹事)  
名誉会員及び特別会員候補者の推薦基準幹事会内規の中で, 名誉会員が賞その他の推薦者になれないことを記した部分の改訂が提案された。次回の幹事会で検討することとなった。
- (9) 海洋環境問題研究会の会則について(小川幹事)  
海洋環境問題研究会の会則案について説明があった。4 月の評議員会で決定することが確認された。
- (10) 2010 年度秋季評議員会議事次第案と資料について(小川幹事)  
評議員会議事次第と資料の確認を行った。
- (11) その他
- 小川幹事より会員名簿に掲載されているアーカイブ部分と企業広告の紹介があった。
  - 70 周年の記念大会イベントを行うかどうかについて意見交換をし, 大げさにならない形で行う方向を模索することとなった。
  - 宇田賞の賞金は学会で出すが, 賞牌は海洋未来技術研究会から出していただけるということが確認され, 評議員会の同委員会報告の中で紹介することとなった。

### 3. 報告事項

- (1) 編集:海の研究  
9月8日の昼休みに編集委員会開催予定であること, 投稿数の推移等について報告があった。電子ジャーナル化に伴ってページチャージを無くしたことを投稿規定に反映するため, 規定の改定を行いたいとの提案があり, 評議員会で諮ることとなった。

次回幹事会:11月に開催